
On Post-Verbal Element "乙密" in Ancient Chinese-Origin Words

YAMADA TAKASHI

Prefectural University of Kumamoto

序

中国中世頃の文献に「乙密」という語の使用が見られる。下っても北宋を下限とし、それ以後の文献には見られなくなる。又、管見の及んだ限りでは、道教・仏教文献以外での使用例は確認されていない。一先ず、こうした状況から見るならば、中古漢語に於いて、そして宗教的文脈に於いて用いられることが多かった語であり、中世末から近世にかけて、この語は文献の上からは忘れ去られてしまったのではないかと推測される。又、『廣韻』に依るならば、「乙」は入声五「質」(於筆切)、「密」も入声五「質」(美筆切)であり、曷韻の状語であるとの見通しが立て易いが、事はそれ程単純でもない様である。この「乙密」の語に就いて少し考えてみたい。

一、道教文献

(一)、『太平經』

「乙密」の語の最も古い用例は、『太平經』に三例確認されるものであろうか¹。卷次に従って見ていくことにする。先ず、卷110 庚部「大功益年書出歲月戒第一百七十九」には次の様に有る。

功勞が有り恩賞を賜るものの、謙遜して敢えてそれを全て受けようとはせず、更に力を尽くし、“用心乙密”に努めるのが最善である。この様であれば、天君は重ねて自ら直接その人物に会い勅令を下す。これが生有る者の福なのだ。(有功勞賜賞、謙遜不敢盡受、益復竭盡筋力、用心乙密爲大。故天君重復自面勅教人、是生之福也)(『太平經合校』p.538)

功勞が有ることに慢心せず、更に精進を重ねる様子が、「竭盡筋力、用心乙密」と述べられている。「筋力を竭盡(する)」と対になっていることからすれば、「用心乙密」は「心を用かせる」様が「乙密」であるという意味と考えられる。その場合、「乙密」は「用心」の様態を示す補語であり、「用心すること乙密なり」と訓ずる読み方が先ず考えられる。更には、「乙密」を「用心」の形式上の賓語と見て、「用心」の離合動詞的性質から、「心を乙密に用いる」と訓読する可能性も有るであろう。何れにしても、「乙密」の語義そのものは、この用例だ

けからは特定出来ないが、但し、「竭盡筋力」との対である以上、一般的意味合いとしては、「用心が周到である」、「用心が行き届いている」、という意味であろうことは想像に難くない。現代中国の研究者に由る現代中国語訳を見るならば、羅熾『文白對照「太平經」注釋』は「乙密」に「草木が土を破って出てくる様に緻密である（像草木破土而出那樣慎密）」と注釈した上で²、「用心乙密」を「用心に更に緻密さを加え並々ならぬ苦心をする（用心更加慎密良苦）」と翻訳しているが³、「草木が土を破って出てくる様に」という説明は、『史記』『律書』辺りに基づくものであろうか⁴。一方、龍晦『太平經全譯』は、「（乙は）“益”に通じ、更に加えるの意（通“益”、更加）」と注釈した上で⁵、本文を「用心し更に緻密さを増す（用心更加慎密）」と翻訳している⁶。「乙」＝「益」は音通に依るものであろう。両者の解釈に依れば、「用心し、乙密す」という連動文として訓読することになる。『太平經全譯』の現代語訳は羅氏訳を参照している様にも思われるが、両者共に、『太平經』の其の他の用例から帰納的に導き出された訳と言えよう。『太平經』の文脈から「乙密」の語義を憶測するならば、「有功勞賜賞」と、道教修業に於いて一定程度の成果を挙げた者が、その成果に甘んぜず、更に高い次元を目指す事として「竭盡筋力、用心乙密」が言われていることからすれば、宗教的により高い境地を目指すことを念頭に置いた表現と考えられる。

二つ目の事例は、卷 111 庚部「大聖上章訣第一百八十」に見られるもので、次の様に有る。

天上世界の事柄を説く声は遙か遠くから届くものであり、それが隠されることはない。それらは自然の中で確認することが出来るのであり、決して遺漏は無いのである。天君は日夜、天と地とこの世界の事柄、“大小乙密の事”を予め知り尽くし、悉く知っているのだ。（天上之事、音聲遙相聞、安得有隱也。此在自然之中相檢、何有脱時乎。天君日夜預知、天上地下中和之間、大小乙密事、悉自知之）（『太平經合校』p.544）

「天君」があらゆる事柄を事前に周知している、という文脈で用いられている「大小乙密事」は、「預知」の賓語であり、そして「大小乙密」は「事」の定語と考えられる。

さて、「事」の定語である「大小乙密」の四字の語義だが、連登崗は「安得有隱也」に続く文に見られることから、「乙密」は「隱密」「秘密」を意味すると解釈する⁷。結論から言えば、連氏の見解は妥当とは思われるが、『太平經』の文脈に即した検討をしておく必要が有るであろう。又、羅熾『文白對照「太平經」注釋』は「大小の事を慎重緻密に考える（慎重緻密思考大小之事）」と現代中国語に訳し、「慎重緻密」という状語として「乙密」を訳出しているが⁸、これは、本論後半で検討する仏典に見られる「乙密」の用例を或いは参照したのではないかと推測され、『太平經』自体に即した解釈ではない。龍晦『太

平經全譯』は、「乙密」とは「秘密のことである。“乙密”とは“密勿”のことであり、“乙”は“勿”に通じ、機密事項を意味する（即秘密。乙密、即密勿、乙通“勿”、機密・機要之事）」と注釈し⁹、「大小秘密の事（大小秘密之事）」と現代語訳している¹⁰。『太平經全譯』の翻訳は『太平經』の文に即したものとと言えるが、「乙密」に就いて、第一例と全く異なる解釈をしているのは何とも落着きが悪い。

第二例の「乙密」は、「大小」の二文字との構成から考えれば、第一に、「乙と密」、即ち、「乙」と「密」が相対する語義である反義連語の可能性を考えねばなるまい。『太平經』には、「深計善惡難易」（『太平經合校』p.199）、「知善惡大小」（同p.324）、「大小善惡、外内遠近者」（同p.326）等の反義連語の連続使用が度々見られるからである。この場合「大小乙密事」の意味は「大きな事柄と小さな事柄、表面的な事柄と緻密な事柄」等という様な意味が予想される。しかし、「密」の反義語としての「乙」の用例は一般には確認出来ないし、更に、「乙密」が双声疊韻であることを考えれば、「乙密」に限っては、反義連語である可能性は低いと思われる。第二に、「乙密」は複音節定語で、「乙」と「密」が同義である可能性が有ろう。『太平經』にはこうした同義連語も多く見られることは既に指摘されている¹¹。この場合は、「大きな事柄、小さな事柄、緻密な事柄」という様な意味となるであろう。この場合は、「大小」は反義連語、「乙密」は同義連語となり、四字句全体としての纏まりは無視されることになるが、反義連語の可能性が低いこと、『史記』「律書」の「物が群がる様（軋軋）」という用例、又、第一例の内容も鑑みるならば、同義連語である可能性が自ずと高いと言えよう。

何れにしても、「乙密」は「預知」の賓語に含まれ、そして『太平經』の思想としては、それを「預知」することが出来るのは「天君」のみであり、常人は預かり知ることが出来ないとされている。その点から憶測すれば、「乙密」の語には「奥儀」「秘儀」等の宗教的高度な境地の意味が含まれていると考えられる。それは、第一例の用法と一貫するものであるし、又、「非神聖之人、不能豫知周竟」（同p.178）という表現でも述べられている、真人の認識能力の絶大性を表現しているとも考えられる。

第三番目の事例は巻111庚部「有知人思慕與大神相見訣第一百八十三」に見られるもので、

大神の教えを受け、私の不十分な点を知ることは出来たが、告げられた一つ一つの内容が偉大であることを知り、更に精進することを望み、その“乙密”を授かりたく、大神の樓閣の入り口に至ったものの、ほっとすることも出来ません。教戒を授かり、未だ及ばない点を授かりたいと思う。（唯蒙大神、通其不足、知所辭辭大、故以貪進、受其乙密、征營門閤、不敢自息、欲得教戒、稟其不及）（同p.558）

と有る。連登崗の見解は同様に「隱密」「秘密」であり、羅熾『文白對照「太平經」注釋』は「その緻密な思想を受ける（接受其縝密思想）」と¹²、『太平經全譯』も「その秘訣を受ける（接受其密訣）」と¹³、「乙密」の意味を「緻密な思想」「秘訣」とした上で動詞「受」の賓語として訳出している。

第二例が賓語中の定語であったのに対し、第三例の「乙密」は賓語そのものである。ここでの「乙密」の語義は、やはり、一定程度の成果を挙げた上で、更により深い教えを求める弟子の口から発した語であることから判断すれば、より深い教え、より枢要なもの、より肝要な点、奥儀、秘儀などを意味する複音節語として用いられていると考えられる。

以上の『太平經』の三例から推測されることは、「乙密」は双声疊韻の同義連語であり、動詞の賓語として用いられれば、何らかの奥儀・秘儀を意味し、動詞の様態補語として用いられれば、奥深いところまで動作が及ぶという意味となる。三例に一貫性を持たせ、第一例を賓語に限定するという解釈も出来ないではないが、むしろ、「乙密」の用法がそこまで限定的ではなく、ある程度の幅を以て用いられていたという見方を採っておきたい。

（二）『西昇經』

次に、東晋前半頃の撰述と見做される『西昇經』の事例を見てみたい。經文中に二箇所確認される¹⁴。第一例は「愼行章」に見られるものである。

老子が述べた、「…心靜かに無欲で道を思い、思いを集中して“一”を守るのだ。“虚”である根源を窮め、“無”である根本に基づき、“剖析乙密”するのだ。玄妙なる言葉を細かく述べ、内なる意を外に表さない様にする。文を何度も唱え、その誠の心を練り、思いを貫くのだ。そうすれば、“真”を行い、それが身体にまで極まり、その玄妙なレベルにまで通じることが出来る。極まることのない根源を論ずる時、神仙を達成することが出来るのだ」と。（老子曰、…恬淡思道、臻志守一。極虚本無、剖析乙密。觀縷妙言、内意不出。誦文萬過、精誠思徹。行真臻身、能通其玄。論無極之源、故能致神仙）（『西昇經集注』「愼行章第四」1/9b/8）

「愼行章」のタイトルが示す様に、この一段は修道の在り方を述べているのだが、「“虚”である根源を窮め、“無”である根本に基づき」に続けて「剖析乙密」の語が見られる。

先ず、「極虚本無」との句作りから考えるならば、「剖析乙密」は複音節動詞とその賓語である可能性を考えねばならず、その場合、「乙密を剖析す」と訓ずることになる。ここに見られる動詞「剖析」の語義に就いては、慧琳『一切經音義』が手際よく整理しているので掲げておきたい。

剖析。〔上の“剖”の字は普後の反である。孔注尚書は「剖は破である」と述べている。杜注左傳では“剖”は“中分”とされている。説文は、從

刀の音聲とし、音の音は儵口の反としている。下の“析”の字は星亦の反である。孔注尚書は「析は分である」と述べている。説文は、木を破ることを意味する会意文字であるとする。“折”に作る場合が有るのは俗字である〔剖析〔上。普后反。孔注尚書云、剖破也。杜注左傳、中分也。説文、從刀音聲、音音儵口反。下。星亦反。孔注尚書云、析分也。説文、破木也、會意字也。或作折、俗字也〕〕（慧琳『一切經音義』T54、411b）

慧琳は、「剖」を「破る、分ける」、「析」を「分ける、裂く」の意味と解する資料を注記し、「分ける・裂く」を「剖析」の基本義と考えている。こうした動詞「剖析」は、抽象事項を賓語とすると、

沛国の劉臻がこっそりと姚察の館に於いて、『漢書』の疑問点十数か所を調べた所、全て“剖析”してあり、全て文献の根拠が有った。（沛國劉臻竊於公館訪漢書疑事十餘條、並爲剖析、皆有經據）（『陳書』卷27「姚察傳」）と有る様に、「分析する」という意味で用いられることになる。この「剖析」という行為は、技術的には容易ではないと認識されていたらしく、

あなたが最初から感情を捨て去り迷いを消し去り、虚心に道を修め、事実に基づいて“剖析”するならば、あたかも指掌の間に見る様に容易となるであろう。（子固以遺情遺累、虚心爲道、而據事剖析者、更由指掌之間乎）（『宋書』卷97「慧琳傳」所収「均善論」）

等の様に、先入観の排除を前提としなければならないとされることが有る。従って、この様な「剖析」は時として奥深い道理を賓語として伴うことになり、王済が以前王湛を訪問した所、枕元に『周易』が有るのを目にした。…済がその内容に就いての発言を求めると、王湛は“玄理を剖析し”、それは微妙な中にも通常とは異なった趣が有るものであり、全て済が今まで聞いたことの無いものであった（済嘗詣湛、見牀頭有周易、…済請言之。湛因剖析玄理、微妙有奇趣、皆済所未聞也）（『晋書』卷75「王湛傳」）と『周易』の「玄理」の「剖析」は「微妙」な点にまで立ち入ったものであったと述べられている。

即ち、動詞「剖析」は、賓語に対して「分析・整理」を加えることを基本義とする。その賓語は時として抽象的なもの、奥深い次元にまで及ぶことが有るが、それでも、そうした賓語に対して「分析・整理」を加えるという姿勢で望むのが「剖析」であると言える。この「剖析」の語は『西昇經』には一例しか見られないが、類似表現としては、

今、あなたの為に教えを説き、全てを表し備に述べ、細かく分けて解釈し、“剖判”し、真偽を区別しよう。（今爲子説、露見敷陳、散解剖判、眞僞別分）（『西昇經』「邪正章第七」2/11b/1）

と見られ、説法し解説することで細かく解釈し真偽を区別する「剖判」の語も、「分析し判断する」という意味の同義語と考えることが出来るであろう¹⁵。

さて、「乙密」を賓語と解する場合のその語義だが、反義連語であれば、「表面的な事柄と緻密な事柄の全てを“剖析”する」となり、同義連語であれば、「緻密な事柄を“剖析”する」となろう。「剖析」の語義からすれば何れの場合も妥当と言えるが、『西昇經』経文の「剖析乙密」の直前に有る「極虚本無」という、根源を窮めることを意味する表現との関りと、『太平經』の事例分析も参照するならば、思想的には同義連語の可能性が極めて高いと推測される。

次に、「乙密」が賓語ではなく、「剖析」という動詞の様態を表す補語である可能性を考える必要が有ろう。『西昇經』には、例えば、「永存縣縣」(1/1b/8)、「玄冒沾沾」(6/20b/1)、「存亡恍惚」(6/17a/2)等の様に、二音節動詞に後置される二音節様態補語の例を確認することが出来るからである。即ち、「剖析すること乙密なり」と訓読すべき用例である。この場合の「乙密」の語義に就いても、可能性としては反義・同義の二つが考えられるが、やはり「極虚本無」との関りから同義連語と見做し、「奥深いレベルまで“剖析”する」という意味と解するのが妥当であろう。

この「乙密」に対して、『西昇經集注』が収める諸注釈の中で唐の李栄のみが注を施している¹⁶。

李栄の説、「…“乙密”とは“妙理”である。“乙”とは“一”のことであり、“密”とは“語”の意味である。神妙なる理は唯一絶対であり、“道心”は微妙であるので、明らかに理解し、整理判断し、窮理盡性しなければならない。だから“剖析乙密”と言うのである。(李曰、…乙密者、妙理也。乙之言一、密乃語也。妙理惟一、道心惟微、曉了分判、窮理盡性。故云剖析乙密也) (『西昇經集注』「愼行章第四」1/10b/2)

李栄の注釈は、「乙」を「一」とし、「密」を「語」と解釈した上で、「乙密」で「妙理」を意味するというものである。その上で、唯一絶対である「妙理」は極めて微妙なものであるため、それを十分に「剖析」していく必要が有ると解釈している。即ち、「乙密」を「剖析」の賓語と解しているのである。「乙」が「一」とあるという理解は、例えば道教經典では「太一」と「太乙」が同義で使われていることから、一般的理解に属するものであろうが、「密」が「語」とあるという解釈は必ずしも一般的とは言えず、例えば「密語」の様な熟語が念頭にあり、そこから敷衍された説明の様に思われる¹⁷。即ち、李栄の注釈は「乙密」という熟語そのものの注解ではなく、「乙」と「密」とに分解した上での解釈となっているのであり、言い換えれば、「乙密」の語が本来持っていたであろう語義に対して李栄は注意を払っていないのである。或いは、李栄はその原義に就いては理解していなかったのかもしれない。更に言えば、「剖析」の基本義である「分析・整理」という点から見た場合、「剖析」の賓語である「乙密」を「妙理」と解釈する点に疑問が無い訳ではない。即ち、道教思想史の観点から見た場合、そもそも、こうした玄妙な「妙理」を「剖析」が意味する「分

析・整理」という分別行為の対象とするのであろうか。そうした点も含み、李栄の解釈は、『西昇經』の原義に捉われず、彼の立場から自由な注釈がなされていると考えられる。

『西昇經』に見られる二つ目の例は「深妙章」に見られるものである。

老子が述べた、「道が述べた言葉は深く玄妙であり、その經戒は“乙密”である。天地万物はすべて“一”から生まれるのである」と。(老子曰、道言深妙、經戒乙密。天地物類、生皆従一) (『西昇經集注』「深妙章第十四」3/17b/6)

「道言深妙」との句作りからすれば、「經戒乙密」は「經戒」を主語とし「乙密」を述語とする形容詞述語文であり、「深妙」との対比からすれば、「乙密」は複音節形容詞と考えられる。とすれば、やはり、同義連語としての「乙密」と考えるのが至当と思われる。即ち、「經典と戒律の内容は深く緻密である」という意味となろう。それを受けて、「道言」でもあり「經戒」でもある「一」から万物は生まれる、と続くのである。

『西昇經集注』が引く唐の徐道貌の注は「徐曰、天得一以清、地得一以寧、萬物得一以生。故曰生皆従一也」(同3/17b/8)と『老子』の語を引用するのみだが、李栄は以下の様に注釈を付ける。

李栄の注。賢しらの思慮を絶つことを“深”と言い、測り知れないことを“妙”と言う。“一”とは“玄”であり、“密”とは“微”のことである。“經法”は深遠であり、“戒律”は奥深く微妙である。説かれている言葉は、幽奥の極みである。皆が天地人万物の全てが道から生じると言っているのは、真実であり根拠が有ることなのだ。(李曰、絶慮爲深、不測爲妙。一者玄也、密者微也。經法深遠、誠律玄微。所説之言、極爲幽奥。皆云、天地人物俱従道生、信而有微也) (『西昇經集注』3/17b/9)

「一者玄也、密者微也」の部分が「乙密」の注釈に該当するが、「乙密」が「一密」に置き換えられていることが分かり、第一例に見た「乙は一」であるという解釈が前提となっていることが分かる。それは、「天地物類、生皆従一」という『西昇經』の内容と関連付けるためには不可欠な解釈であり、逆に言えば、「慎行章」での注解は「深妙章」での解釈を先取りしたものと言えるかもしれない。「乙密」を「一密」に置き換えた上で、「一」は「玄」であり、「密」は微であると解釈している。即ち、「經典と戒律は深く知りがたく微妙な内容である」ということになる。「密」を「語」と解した前例とは異なるものの、ここでも李栄は、「乙密」を熟語としてではなく、逐字的に解釈していることが分かる。

この箇所には就いては北宋・徽宗も注釈を付けている。

道は奥深く測り難く、玄妙で表現し難い。經典は道を記しているの、その戒を勧める言葉もまた玄妙で深く隠れているのである。(道深而難測、妙而難名。經以載道、故其勸戒之言、亦玄微而隱密也) (『西昇經』中

と見られる。「玄微而隱密也」の箇所が「乙密」の注釈に該当すると思われるが、その解釈は直接的には李栄の解釈を踏まえたものと言うことが出来よう。

以上の『西昇經』の二例に一貫性を持たせるならば、第一例を様態補語と見做し、「乙密」の語は動詞・名詞に後置され、前置成分の様態を表示する語であると理解することになり、それは、動詞・名詞未分の古代漢語の性質に即した解釈となると思われる。しかし、第一例の「乙密」を賓語と見做す可能性も十分に残るものと思われ、賓語も含む後置成分というより大きな括りの中に「乙密」を位置付けることが可能であろう。後置という枠の中で使用の自由度が比較的高かったと考えられるのである¹⁸。

以上の『太平經』『西昇經』の事例は道教文献としては早期のものであり、その用法は自由度が比較的高く、逆に言えば、用法が確立したものではないことも窺える。

さて、時代を少し下げると、『西昇經』に関してもう一例、北宋・陳景元の「序」に「乙密」の使用が見られる。

西昇經集註序…

その時、関谷函の役人の尹喜が（老子の発する）気を遥かに望み、偉大なる真人が西方へと旅立とうしていることを知った。そこで、うやうやしく道にて止め、建物に迎え入れ、“請問乙密”したので。そこで、（老子は尹喜の）ために若干の著述を著わした。その奥深い言語と内容は、五千の言葉に見え隠れしているのである。（西昇經集註序…當是時也、關尹望氣、知有博大真人西遊。乃齊莊遮道、邀迎至舍、請問乙密。於是復爲著言若干。

其微言奧旨、出入五千文之間）（『西昇經集注』、陳景元「序」1a/2）

陳景元の他の著述には「乙密」の語が一切見られないことからすれば、『西昇經』経文に見られる「乙密」の語を陳景元は採用したと考えるべきであろう。「序」が述べているのは、周国が衰亡するであろうことを察知し西方に立ち去ろうとする老子に気付いた関尹喜が老子を舍に招き、「請問乙密」し、その内容を著述させたという、所謂『老子道德經』撰述に関する逸話である。「請問乙密」は、「乙密を請問す」（動詞＋賓語）と読むか、「請問すること乙密なり」（動詞＋様態補語）と読むかの二つの解釈が可能と思われる。そして、続く文に見られる「微言」との関りからすれば、前者の場合であれば、「言語表現が困難な奥深い内容を尋ねた」という意味となり、後者であれば、「質問の仕方が言語表現が困難な奥深い程度であった」という意味となるであろう。陳景元は、李栄の様に「乙」と「密」とを分解することはせず、一つの熟語として解釈しようとしており、その点では、『西昇經』の原義に即そうとしていたと言えよう。

陳景元の「乙密」の用法に関しては、次の『橐籥子』の例も参照となる。道教文献である『橐籥子』は唐～宋の間と推測されており¹⁹、「乙密」の語を用

いる文献としては、陳景元と同様に近世近くにまで下る事例である。

そこで、迷える者は三日三晩、眠ることも忘れ、思索が続けたが答えに到らず、とうとう骨立の下に出向き言った、「“神監”の道理については、ほんやりとしていて理解出来ません。どうか先生、“賜垂乙密”して下さい」と。(於是、惑人遂三日三夜、不寢不寐、思之不逮、至於骨立曰、神監之理、茫然莫解思。惟先生賜垂乙密) (『橐籥子』2b/6)

ここでは、弟子である「惑人」が「神監」の意味に就いて三日三夜、不眠不休で考察したものの理解することが出来ず、その解釈を師に仰ぎ、「惟先生賜垂乙密」と発言している。弟子が師匠に質問した具体的内容が「神監」であるから、「乙密」は賓語ではなく、補語であると見做し、「賜垂すること乙密たらん」と訓読することが考えられる。「惑人」が理解出来なかった「神監」に就いて丁寧に説明がなされることが求められたと言う訳である。しかし、又、教示を請うた内容を「奥儀・奥要」とした上で、それを「乙密」の語に表現させているとするならば、「乙密」を賓語と見做すことも可能であろう。

陳景元「請問乙密」と『橐籥子』「賜垂乙密」は、何れも、理解が困難な事柄に就いて、その説明・解釈を師に求めるという文脈で用いられている「乙密」であり、一種の定型表現と思われる。撰述時期が近い点でも両者は共通している。賓語か補語か、或いは両者未分かという点がやはり判然としない点は『太平經』『西昇經』と同様であり、逆に言えば、それが現在確認し得る限りでの道教文献に於ける特徴ということになるのだが、陳景元と『橐籥子』の場合は、より定型句として固まっている様に思われる。それは、既に「乙密」が生の文脈では用いられなくなっていたことを示しているのではないだろうか。しかし、陳景元と『橐籥子』の事例が、より高い教えを求めて発せられた表現である点は、『太平經』の第一、第三例と共通する性質を持つものであり、そうした意味合いを留めつつ定型句となったものなのではないだろうか。

二、仏教文献

次に仏教文献に目を転じたい。仏典の「乙密」の使用も比較的早期の翻訳仏典に限定されており、その点では道教文献と共通している。先ず、西晋・竺法護(AD239～316)が訳出した『正法華經』に「乙密」の用例を二例確認することが出来る。

そこで、賢者・阿難は自ら考えた、「我々もこの予言を受けようではないか」と。心にこの様に思うと、“發願乙密”し、座より立ち上がり、…(於是賢者阿難自念言、我寧可蒙受決例乎。心念此已、發願乙密、即從坐起、…) (竺法護譯『正法華經』「授阿難羅云決品第九」。T9,97c～98a)

又、溥首に次の様に語った、「菩薩大士よ、一切の現象は全て空無であるとしなければならない。…無所有に及べば、諸々の言葉を除き、無為にも執着せず、想と不想の分別も消え、様々な思いを克服することが出来る。菩薩よ、もし、この一切の現象を“乙蜜觀察”し、ああ、この行うべきを修めたならば、“威儀礼節二事”に到るというものだ。(又語溥首、菩薩大士、觀一切法、皆爲空無。…逮無所有、除諸言辭、不住無爲、無想不想、得伏諸想。假使菩薩、乙蜜觀察斯一切法、欸欸、修此所當行者、常住威儀禮節二事) (『正法華經』卷七「安行品第十三」T9,107c)

二例目の「乙蜜」は「乙密」の誤写であろう。

まず、漢訳である『正法華經』と梵本仏典との対照を確認しておくならば、辛島静志『正法華經詞典』に依れば、「乙密」は梵文「prārthayaitvā」に相応し、それは earnestly, resolutely, minutely, thoroughly(?) 等の語義であるとされている。一例目は、異訳である鳩摩羅什訳『妙法蓮華經』等には相等する箇所がなく、二例目では梵文原典に相応する表現がないとされている²⁰。参考までに、梵本からの日本語訳を紹介するならば、一例目は「ところで、そのとき、尊者アーナンダは考えた。“我々もこのような予言をうけたいものだ”と。こう考え、熟慮し、熱望して、座席から立ち上がって、…」とされ、二例目は、「実に、マンジュシリーよ、菩薩大士は常に、あらゆるものをこのように觀察して暮らす。…」とされている²¹。

次に漢語の性格から検討を加えて見たい。一例目では、「發願」という動詞の性格を踏まえるならば、「乙密」が「發願」の賓語であることは考えられず、「乙密」は様態補語と見做すべきである。即ち、梵文仏典からの訳文「熟慮し、熱望して」の箇所の「熟」「熱」等が「乙密」に相等すると思われる。即ち、「發願乙密」は「發願すること乙密にして」と訓読し、「發願の仕方が十分に徹底したものであった」という意味と考えられる。

二例目では、ここでは、「斯の一切法を乙蜜に觀察すれば」と訓読する、複音節動詞「觀察」の状語として「乙蜜」が用いられている。梵文仏典に「乙蜜」に相等する語が見られないことから、「乙蜜」は竺法護が翻訳の際に加えた語と考えられる。同じ竺法護の用例であることからすれば、状語としての「乙蜜」も「十分に徹底して」の意味と考えられよう。

これらを要するに、『正法華經』に於ける竺法護の「乙密(蜜)」の用法は、「十分に徹底して」の意味であり、様態補語か状語かの違いがあるものの、何れの場合も動詞の賓語ではあり得ないことが分かる。

更に、竺法護訳出『佛說普門品經』にも「一密」の語が見られる。以下に見る『舊雜譬喻經』の「乙密」が版本によっては「一密」となっていたという状況、或いは「乙は一である」という李栄の解釈を踏まえるならば、『佛說普門品經』の「一密」が問題とする「乙密」である可能性も有るであろう。

仏は文殊菩薩に語った、「…この様に、菩薩よ、諸々の開士が経巡るべき所がこの様であって、一切に対して平等となり得て、その道に至り退転することなく、教えの要に入り、“深微一密”となり、空無寂靜となるのだ。これが“入普門定門の法”を学ぶということだ。(佛告薄首、…如是薄首、諸開士所可周旋爲若此、一切悉等、以居平等、具足至道不轉、普入法要、深微一密、空無寂靜。是爲學入普門定門之法。)(竺法護譯『佛說普門品經』。T11,771a)

異訳である『大寶積經』所収菩提流支訳「文殊師利普門會」には「一密」に対応する語は無い²²。ここでは、至道を達成して後戻りすることが無く、^{おしえのかなめ}法要全体に至る、その様態が深く微妙であり、「一密」であり、空無寂靜である、と述べられている。即ち、「深微一密」の四字で「具足至道不轉、普入法要」の様態を表しているのであり、様態を示すという点では「乙密」と同様ではあるものの、「乙密」単独で複音動詞に後置される補語であった『正法華經』の場合とは異なっている。

こうした仏典に見られる「乙密」の語は、竺法護よりも若干早い時期から用いられていた様である。三国時代呉の康僧會(?～AD280)訳出『舊雜譬喻經』には以下の様に有る。

師は言った「そもそも学問は思索を以ってしなければならない。(その思索が)乙密であって始めて達成されるのだ。(その思索が)簡単粗略であるために学問が達成されないのは、師の非ではない」と。(師曰、夫學當以意思、惟乙密乃達之也。夫簡略者不至、非師之過也)(康僧會訳『舊雜譬喻經』。T4,514b)²³

象の足跡を見て、片目が見えない母親象が雌の小象を孕んでいて、その背に女の子を妊娠中の女性が乗っていた事を察知した仲間弟子の見識の高さを羨んだ一弟子に対して、師が述べた言葉に「乙密」が見られる。この「乙密」の語は動詞「意思(思索する)」の様態を示す補語と考えられ、その語義は「簡略」と対をなすものであろう。即ち、「思索のし方が周到緻密である」の意義と考えられる²⁴。

仏典に於ける事例も極めて限られたものでしかないのだが、そこから窺える用法は、「十分に徹底した」「周到緻密」などの意味の状語、或いは様態補語に限定されており、賓語としての事例は確認されなかった。その点が道教文献とは異なっていると言えよう。

結語

「乙密」は、仏典に於ける用例が僅かであり、竺法護にしても僅かに数箇所ではしか用いていないことからすれば、仏典の翻訳用語としては一般的なもので

はなかったと考えざるを得ない。むしろ、仏典翻訳語としては通常は用いられない語が何かの弾みで挿入されてしまったというのが真実ではないだろうか²⁵。一方の『西昇經』には仏典の思想語彙の借用が見られることが指摘されているが²⁶、仏典に於いてそれ程一般的ではなかった「乙密」の語を、仏典の思想語彙として意識した上で、『西昇經』の撰者が用いたとも考え難いであろう。『西昇經』の場合も、やはり言い回しの中で自然と挿入された語であると考えるのが妥当なのではないだろうか。この様に考える場合、この「乙密」の語はどちらかと言えば口語的な性質を備え、經典撰述の過程で自然と挿入されてしまったと考えることが許されるのではないか。この様に推測するには幾つかの状況証拠がある。そもそも、「乙密」の或いは初出でないかと推測される『太平經』の文章は口語的色彩を留めていると指摘されることがある²⁷。そして、何よりも、本論で検討した三例の「乙密」が何れも『太平經』の「庚部」に含まれていることは示唆的でもある。「庚部」はある種の均一性を持つ纏まりと考えられ、その言語的特徴は對話体、会話体、散文体等と指摘され、『太平經』の他の「部」から区別されている。更には、この對話体、会話体、散文体の中では、会話体の撰述が最も古いのではないかと推測されている。三例の「乙密」の内の二例がこの会話体の部分に含まれているのである²⁸。又、竺法護が「乙密」を用いた仏典の異訳では「乙密」の語が採用されなくなっている点も、仏典の翻訳語としては確立していなかった口語が採用されていたという推測を裏付けている様に思われ、『西昇經』の撰述時期、竺法護の活動した時期が同じ晋代であるというのもその点を示唆しているであろう。そして、近世の二例は、それが定型句となったものと見做せるのではないか。仮に、李榮の様に思想的語彙としての意味を「乙密」の語が本来備えていたのであれば、上述の様な状況は発生し難いであろう。そして、こうした「乙密」の語は、周到さ、緻密さ、奥義、秘儀等に関わる語義を持っていたため、自ずと宗教的文脈で用いられることが多かったと考えられるのである。

道・仏何れも用例が少なく、限られた資料に基づく臆測に過ぎないことにはなるのだが、道教文献の場合は用法に幅が有るのに対し、仏教文献の場合は、補語・状語に限られていた。本来道教文献の様に自由度が高かったものを、状語・補語に限定する形で仏典翻訳に用いたのか、或いは、その逆に道教文献が後からより自由に使用したのか、『太平經』の会話体が中国語としてどこまで遡ることが出来るのかが鍵であることになろう。この点は後察を俟ちたい。又、道・仏の違いが、翻訳言語であるかそうでないかの違いなのか²⁹、時代的問題なのが、或いは、現存する用例がたまたまその様なものであったに過ぎないのか、限られた資料からでは説明出来ない点も多く残っている。今後の課題としなければならないであろう。

又、「乙密」の語の出自も未詳と言わざるを得ない。「乙密」の字解に就いては、

既に本論中で紹介したものの他に、連登崗は『説文解字』等を参照し、本来は「匿（隠れる）」を意味する「𠂔」であったものが、「乙」と誤った結果としている。「乙密」の語義が「隱密」であることを前提とした見解であろうが、一つの有力な説ではあろう。だが、「𠂔」は『廣韻』では上声十九「隱」（於謹切）となり、疊韻ではなくなってしまう。口語的要素の問題を考え、「乙密」が双声疊韻であることを考えるならば、龍晦氏が指摘する「密勿」の語を、「秘密」の意味ではなく、むしろ「勤め励む」の意として参照すべきかもしれない。「勿」は『廣韻』では入声五「物」（文弗切）であるから、疊韻と言えるであろう。又、例えば、東晋・求那跋摩（AD377～431）の『菩薩善戒經』に「乙致 蜜致」（T30,996c）と、口誦される「陀羅尼呪」に類似の表現が見られ³⁰、こうした音韻の響き自体も或いは考察の対象とすべきなのかもしれない。この点も後察を俟ちたい。

【注】

- ¹ 最も古いとしたのは、『太平經』なる文献の出自が、後漢の早期道教と何らかの関係が有るであろうという認識に基づく。しかしながら、現行本『太平經』テキストが陳時の再編纂本に基づくものであることに就いては、前田繁樹『初期道教經典の形成』「第一編第二章 再出本『太平經』について－六朝末道教諸派の中で－」（汲古書院、平成16年）を参照。尚、本論に於ける『太平經』の引用は、王明編『太平經合校』（中華書局、1985年版）を用いた。
- ² 羅熾主編『文白對照「太平經」注釋』（西南師範大學出版社、1996年）中巻 p.878。
- ³ 前掲羅氏著下巻 p.892。
- ⁴ 『史記』「律書」には「乙者、言萬物生軋軋也」と有る。
- ⁵ 龍晦、徐湘靈、王春淑、廖勇訳注『太平經全譯』（貴州人民出版社、1999年）下巻 p.1058。
- ⁶ 前掲龍晦他著下巻 p.1062。
- ⁷ 連登崗「釋『太平經』之“賢儒”、“善儒”、“乙密”」（『中國語文』1998年第3期（總第264期）所収）。
- ⁸ 前掲羅氏著下巻 p.914。
- ⁹ 前掲龍晦他著下巻 p.1075。
- ¹⁰ 前掲龍晦他著下巻 p.1076。
- ¹¹ 俞理明「『太平經』語言特點和標點問題」（杭州大學古籍研究所・杭州大學中文系古漢語教研編『古典文獻與文化論叢（第二輯）』所収。杭州大學出版社、1999年）。
- ¹² 前掲羅氏著 p.926。
- ¹³ 前掲龍晦他著 p.1107。

- ¹⁴『西昇經』の「乙密」に言及した先行研究は、前掲前田氏著が収める論考だけであろう。前田氏は『西昇經』に見える仏教語、或いはそれと覚しき語彙として「乙密」を指摘しているが、「「乙密」の語のみは未詳である」(p.233)とされている。尚、『西昇經』の撰述時期に就いては、同氏の東晋前半頃との推測が至当と思われる (p.199)。前田氏著 p.217 注 (2) に先行研究の見解が整理されている。就きて参照されたい。
- ¹⁵ちなみに、『西昇經集注』が収める唐・李榮の注は、この箇所に対して「露見、顯示也。敷陳、演説也。散解、開釋也。剖判、決斷也」(2/11b/2) と注釈している。
- ¹⁶『西昇經集注』が収める諸注釈に就いては、リヴィア・コーン (明神洋訳)「道家・道教の神秘主義における永遠の生命」(坂出祥伸編『中国古代養生思想の総合的研究』所収。平河出版社、1988 年。pp.532-533) を参照。この箇所に対しては、宋・徽宗注『西昇經』は「乙密」に注釈を施していない。
- ¹⁷例えば、東晋・佛跋陀羅訳『大方廣佛華嚴經』の「巧方便微密語」(T9,632a)等の様に、仏典では「密語」の語は多用されている。又、道教經典である『真誥』に見られる「密言」(2/18a/10、7/ 5b/ 8) の語なども参照されるべきであろう。
- ¹⁸尚、『西昇經』は全体が韻文で書かれており、第一例では「一」と「密」、「出」と「徹」が韻を踏み、第二例では「密」と「一」が韻を踏んでいる。『西昇經』の脚韻に就いては、前掲前田氏著に言及が有る (p.201)。
- ¹⁹『囊籥子』の撰述時期に就いては、『中華道藏』「解題」は宋代と推定し、胡孙琛主編『中華道教大辭典』(中國社会科學出版社、1995 年)は唐～宋の間と推定する (p.373)。
- ²⁰辛島静志『正法華經詞典』(創価大學國際佛教學高等研究所、1998 年)。又、同氏「漢譯佛典的研究(附篇:佛典漢語三題)」(禪籍俗語研究會編『俗語研究』第四期所収。1997 年)も「乙密」に就いて、「筆者認為是“詳細”、“精心”“仔細”、“周密”的意思、但還需要進一步考證」(p.35)と述べている。異訳を提示しておくならば、一例目は「爾時阿難、羅睺羅而作是念、我等每自思惟、設得受記、不亦快乎。即從座起、…」(『妙法蓮華經』T9,29b、『添品妙法蓮華經』T9,164a)となっており、二例目は「復次菩薩摩訶薩、觀一切法空、如實相、不顛倒不動、不退不轉、如虛空無所有性、一切語言道斷、不生不出不起、無名無相、實無所有、無量無邊、無礙無障。但以因緣有、從顛倒生、故說常樂。觀如是法相、是名菩薩摩訶薩第二親近處」(『妙法蓮華經』T9,37b、『添品妙法蓮華經』T9,171c)となっている。尚、『正法華經』の用例等に就いては皇學館大学の河野訓先生の御教授を頂いた。記して学恩に深謝申し上げる。
- ²¹松濤誠廉・長尾雅人・丹治昭義訳『法華經 I』(中公文庫、2001 年) p.254、同『法華經 II』 p.65。

- ²² 「…若諸菩薩於如是等一切三昧、善通達者、是則已爲修學此法」(『大寶積經』唐・三藏菩提流支訳「文殊師利普門會」T11, 159a)。
- ²³ 『大正新脩大藏經』の校勘に依れば、明刊本は「乙密」を「一密」と作るとされる。
- ²⁴ 孫昌武・李賡揚訳注『雜譬喻經譯注(四種)』(中華書局、2008年)は「乙密乃達之」の個所を「做到細密才能通達事理」(p.38)と現代語訳し、「乙密」を「細密」と理解している。但し、音通に依るのか、字形の類似に依るのか不明ではあるが、「乙：通“已”」と注釈を付けていることから、「乙密」の「密」のみに「細密」の意を汲んでいることが分かる。
- ²⁵ 竺法護の漢訳訳出に関する全体的な問題に就いては、ジャン＝ノエル・ロベール「『法華經』における竺法護の翻譯の方法—第三章「譬喻品」を中心として—」(京都大學人文科學研究所編『中國宗教文獻研究』所収。臨川書店、平成19年)を参照。
- ²⁶ 前掲前田氏著を参照。
- ²⁷ 例えば、前掲兪理明論文は『太平經』の言語に就いて、「主として口語を直接記録するという方式を採用している(主要採取了口語直録這樣一種方式)」(p.77)と述べている。
- ²⁸ 蜂屋邦夫「太平經における言辭文書—共・集・通の思想—」(『東洋文化研究所紀要』第九十二冊所収、昭和58年)は、「庚部」を「散文體」と「對話體」から構成され、それは他の「部」の間答體とは異なり、思想的にも異なっていると指摘する。高橋忠彦「『太平經』の思想構造」(『東洋文化研究所紀要』第九十五冊所収、昭和59年)は、蜂屋氏の所謂「庚部」の「對話體」を「會話體」とし、「散文體」を「說教體」とした上で、それらにはある種の均一性が有るとした。高橋氏の分類に従えば、三例の「乙密」の内の一例が「說教體」に、二例が「會話體」の文章に含まれることになる。尚、高橋氏は「『太平經』の會話體の性格について」(『東洋文化研究所紀要』第百五冊所収、昭和63年)では、「說教體」の分類を「散文體」に改めている。
- ²⁹ 仏典の「漢訳」と「撰述」を巡る様々な問題に就いては、船山徹「『漢訳』と『中国撰述』の間—漢文仏典に特有な形態をめぐって—」(『佛教史學研究』第45巻第1号。平成14年)が、東晋以前の仏典をも材料として論じている。就きて参照されたい。
- ³⁰ この「陀羅尼呪」に就いては、「菩薩爾時從佛受已、深心觀察、知字無義。以無義故無有義語。若無義語、辭亦無義、法亦無義。以無義有一切諸法、悉不可說」(T30.996c)と述べられ、口誦される「陀羅尼呪」の文字には字義が無いとされている。

【付記】：私が初めて「乙密」の語を知ったのは、学部学生時代に『西昇經』を通読した時であったと思う。その時点では「乙密」に考察を加える余裕は全く無かったが、数年後、当時『西昇經』の研究を精力的に進めておられた故・前田繁樹氏と雑談した際に、前田氏が「“乙密”はよく分からないが、別の道教文献の例も見つけましたよ」とおっしゃられた。氏が明言されなかった經典名を、その時は私も敢えて尋ねることはしなかったが、その後、竺法護『正法華經』を通読した際に「乙密」の語が用いられていることに先ず気付き、前田氏の所謂「別の道教文献」が『太平經』であったことを知るのは、更に数年後に『太平經』を通読した時であった。前田氏が「もともと『太平經』を研究したかった」と言われていたのをその時思い出したものである。

前田氏自身は認識されていなかったことだが、「乙密」に対する私の関心は、前田氏との時間にすれば僅かなやりとりから醸し出されたものであることを付け加えておきたい。

【凡例】：『道藏』所収文献は、巻数・紙数・左右・行数を、「二卷・第四紙・右・5行」→「(2/4a/5)」と略記し、『大正新脩大藏經』所収文献は、巻数・頁数・段を、「第9巻・29頁・中段」→「(T9,29b)」と略記した。